

国立国語研究所学術情報リポジトリ

接触場面のナラティブにおける母語話者の調整行動：
中国人日本語中級学習者との協働構築に向けて

メタデータ	言語: 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-07-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏, 雨佳, 中井, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000012

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



接触場面のナラティブにおける母語話者の調整行動

——中国人日本語中級学習者との協働構築に向けて——

夏 雨佳^a 中井陽子^b

^a 東京外国語大学 大学院生 / 国立国語研究所 共同研究員

^b 東京外国語大学 / 国立国語研究所 共同研究員

要旨

本研究は、接触場面において、日本語母語話者が中国人学習者（中級レベル）に自身のナラティブを理解して参加させるために行った調整行動に焦点を当て、母語話者と学習者がどのようにナラティブを協働構築しているのかを探ることを目的とする。

会話データは、母語話者 J1 が語り手として学習者 3 人（C1, C2, C3）に語る中国留学中の苦労話を録画・文字化したものである。この苦労話のナラティブの各構成要素（導入部、方向付け部、展開部、結果部、終結部、評価）とナラティブの中で展開される話題において、母語話者 J1 が語り手としてどのような調整行動を行い、学習者が受け手としてどのような言語・非言語行動を行っているのかを分析した。

分析の結果、学習者の日本語の理解力不足のため、母語話者の長いナラティブを理解して参加することが難しく、ナラティブの方向付け部や結果部の途中で、自身の類似体験を語る話題に転換し、ナラティブを中断してしまう様子が見られた。しかし、母語話者がそのナラティブの中断を受け入れ、その後、自身のナラティブを分割しながら語っていた。そして、このナラティブの分割の際、J1 は、特に、語り手として話題の展開を管理する、学習者に理解する時間を与える、学習者に自身のことを話させたりする等の調整行動を行っていることが分かった。

これをもとに、ナラティブの語り手の母語話者による調整行動が重要である点を主張した。さらに、学習者もナラティブの受け手になる際に、ナラティブの構成要素を知り、語り手の話を理解しつつ、共感や理解を示すことによって、ナラティブの展開を促す必要があること、および、ナラティブの終結部でナラティブと関連する感想・意見を述べることの重要性を指摘した*。

キーワード：接触場面、ナラティブ、協働構築、母語話者、調整行動

1. はじめに

日常会話において我々は自身の経験をもとにしたナラティブを語り、相手から共感を得ることで、人間関係の形成を図ることがある。そのため、語り手がナラティブを語っている際、受け手も共感を示したり評価したりすることでナラティブを協働で構築する必要がある (Maynard 1989, 李 2000, 中井・夏 2023 等)。だが、日本語母語話者と学習者による接触場面では、母語

* 本稿は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」のサブプロジェクト「日本語学習者の談話の縦断コーパス研究」（いずれもプロジェクトリーダー：石黒 圭）、および、2019～2022 年度科学研究費（基盤研究（C））「インターアクション能力育成のための会話データ分析の手法を学ぶ教材開発とその検証」（19K00702, 研究代表者：中井陽子）の研究成果の一部である。また、第 45 回社会言語科学学会研究大会（2021 年 3 月 14 日、於・オンライン）におけるポスター発表と大会発表論文集原稿（夏・中井 2021）の内容をもとに大幅に加筆修正を行って執筆した。本研究にご協力くださった皆様、口頭発表の際に貴重なご意見をくださった皆様にお礼申し上げます。

話者が自身のナラティブを語る際、学習者が受け手として共感を示す等、適切な反応ができない場合もある（夏 2020）。こうした場合、学習者が受け手の反応の仕方を習得するだけでなく、母語話者が分かりやすく話す等の言語・非言語による調整行動も必要になる（ファン 1998, 中井 2012, 柳田 2015 等）。しかし、日本語接触場面でナラティブを語る際に母語話者の調整行動がどのように行われているかに関する研究は管見の限りない。また、実際の日常会話で交わされるナラティブは途切れずに秩序よく語られるものではなく、その中では内容のまとまりを持つ小さな話題がそれぞれ展開されていることが多く、時に途中から異なる話題へ発展することもある。そのため、ナラティブとその中で話題がどのように展開するかを見る必要もある。さらに、これまでのナラティブの研究は、主に参加者の言語行動に着目したものが多く、会話時の参加者の意識も踏まえて分析したものは少ないため、会話データおよび参加者の意識の両面から詳細に分析する必要がある。

そこで本研究では、日本語母語話者が語り手として中国人日本語中級学習者に語る苦労話のナラティブとその中で展開する話題に着目することとした。具体的には、母語話者が学習者にナラティブを語る際に、学習者によって一旦中断されたナラティブを再開・持続することで分割して語り、学習者に自身のナラティブを理解して参加してもらえるようにするといった調整行動に焦点を当てる。そして、特にそのナラティブの分割の前後に行われる母語話者の語り手としての言語・非言語による調整行動、および学習者の受け手としての言語・非言語行動による反応の仕方の特徴について、会話データをもとに詳細に分析する。その際、フォローアップ・インタビュー（FUI）によって、ナラティブ参加時の母語話者と学習者の意識も探りつつ、より深く分析を行う。これにより、接触場面におけるナラティブの協働構築の特徴を明らかにし、母語話者と学習者のより良い人間関係の形成に寄与することを目指す。

以下、2. でナラティブの分析の枠組みに関する先行研究を概観し、3. で研究方法について述べ、4. でナラティブの質的分析を行う。これをもとに、5. で総合的な考察を行い、6. で本研究のまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究

まず、2.1 でナラティブの定義と構造、話題の推移の型と階層性、2.2 でナラティブにおける言語行動と日本語母語話者による調整行動、2.3 で日本語の母語場面と接触場面におけるナラティブの比較研究について述べ、これらをもとに、2.4 で先行研究のまとめと本研究の位置づけを述べる。

2.1 ナラティブの定義と構造・話題の推移の型と階層性

母語場面のナラティブ研究は、これまで多く見られる（Labov 1972, Tannen 1984; 2005, 李 2000, 西川 2005, 中井・夏 2023 等）。その中で、Labov (1972: 359-360) はナラティブを「言語による節の連鎖と実際に起こった出来事の連鎖を整合して過去の経験を要約して話す（recapitulate）1つの方法」（筆者和訳）と定義し、完全に展開されたナラティブの構造には6つ

の構成要素 (elements) があるとしている (表 1)。

表 1 ナラティブの 6 つの構成要素の定義 (Labov 1972: 362-370 筆者和訳)

導入部	ナラティブの要点を要約する部分
方向付け部	時、場所、登場人物とその行為、状況を明確に示す部分
展開部	「それからどうしたのか」という質問に答える部分
結果部	「最終的に何が起こったのか」という質問に答える部分
終結部	ナラティブの終わりを示す部分と、出来事が語り手に与えた影響を示す部分 出来事の時点から現時点に戻る部分
評価	語り手が出来事から得たことと、「なぜこのナラティブを語るか」という理由を示す部分 ナラティブのどの部分でも挟み込むことができる

李 (2000: 8) は、物語を「過去に発生した出来事を雑談の中で報告すること」と定義している。そして、雑談の中で物語を進めていく際は、受け手の行動に影響を受ける等、会話参加者が相互に働きかけ合うため、物語の「開始→持続→終了」といった典型的な型だけではなく、物語の中断、再開、流失が起こり、より複雑な展開の型が見られるとしている。表 2 は、李 (2000) の物語の展開の型の定義である。

表 2 雑談の中の物語の展開の型 (李 (2000) をもとに作成)

物語の開始	発話順番を受け取る・取る・競う・持続することによって、物語を開始すること
物語の持続	開始した後の物語を終わりまで続けていくこと
物語の中断	他の会話参加者の自主的な言語行動または非言語行動による影響を受けて、語り手が今までしてきた出来事の報告をやむを得ずやめること
物語の再開	物語が中断された後、語り手がその物語を再び続けること
物語の流失	物語が中断された後、語り手がその物語を再び続けないこと
物語の終了	語り手が出来事について報告し終わった時点で物語を自主的に終えること

中井・夏 (2023: 94) は、Labov (1972), Tannen (1984; 2005), 李 (2000) を参考に、ナラティブを「日常会話の中で過去の出来事を語るもので、1 つ以上の時間的接合点が含まれるもの」と定義している。

なお、実際の日常会話で交わされるナラティブの各構成要素の中では、内容のまとまりを持つ小さな話題がそれぞれ展開されていることが多い。また、ナラティブが中断して少し異なる話題に発展することもある。そのため、ナラティブの構成要素と話題の関係を見る必要もある。

話題について、南 (1981: 90) は「まとまった意味」から成るものと定義し、「話題の推移の型」を分類している (表 3)。この話題の推移の型は、ナラティブの各構成要素の中で展開される話題を考える上で参考になる。

さらに、佐藤他 (2022: 25) は、ザトラウスキー (1993, 2003), 三牧 (1999), 中井 (2012) を参考に、雑談での「話題」について「会話の中で、導入・展開された内容のまとまりを持った発話の集合体で、その前後に沈黙等の切れ目を示す要素が来るもの」と定義している。そして、話題には階層性があり、隣接する複数の関連話題で 1 つの大きい話題を構成することがあるとし、包括的で大きい話題を「大話題」、その中に含まれる下位話題を「中話題」、中話題に含まれる下位話題を「小話題」としている。

表3 話題の推移の型 (南 1981: 93-95)

連続	a. 相接する二つの談話の内容に百科事典的観点からなんらかの類縁性が認められる場合 b. 内容が連続していると認められる談話の連鎖があり、その前またはあとに一つの内容上異質な談話をはさんではじめの談話の連鎖と内容上類縁性のある談話がある場合	変化	後続する談話の内容と先行する談話の内容との間には共通した特徴がありながら、後続する談話に先行の談話にはない特徴も見られる場合	発展	その先行の談話にはない特徴が、それよりも前に現れたことがない新しいものである場合
	停滞		内容上の変化が見られないもの	回帰	直接となり合う談話とは内容に変化があるものの、それよりも前に現れたものがまた出て来たもの
断絶	後続する談話の内容が、先行する談話のそれとまったく違うものになっているもの	新出	その会話部分で今まで話されたことのない、まったく新しい内容が出て来た場合		
		再出	その会話部分の先行のどこかの談話で話されたことがある話題がまた出て来たもの		

以上の「ナラティブの6つの構成要素」(Labov 1972)が「物語の展開の型」(李 2000), 「話題の推移の型」(南 1981) および「話題の階層性」(佐藤他 2022) とそれぞれどのような関係になっているかを図1に示した。図1のように、1つのナラティブには「6つの構成要素」があり、それらは「物語の展開の型」から見ると大きく「開始→持続→終了」の3つの部分に分けられるが、その中で中断、再開、流失も起こりうる。そして、これらを「話題の推移の型」の観点から見ると、ナラティブの開始(導入部)に断絶(新出, 再出)が見られ、持続(方向付け部, 展開部, 結果部)に連続の変化(発展, 回帰)と停滞が見られ、終了(終結部)に連続の変化(発展)が見られる。また、「話題の階層性」で見ると、1つの長いナラティブが「大話題」となり、その中の各構成要素が「中話題」、さらにその中の小さな話題が「小話題」となると言える¹。

Labov (1972) ナラティブの6つの構成要素		李 (2000) 物語の展開の型		南 (1981) 話題の推移の型		佐藤他 (2022) 話題の階層性			
ナ ラ テ ィ ブ	導入部	評価	開始	断絶:	新出	大 話 題	中話題	小話題	
	方向付け部				再出		中話題	小話題	
	展開部		持続	中断 再開	流失		連続:変化:	中話題	小話題
	結果部							発展	中話題
	終結部		終了	連続:停滞	回帰		中話題	小話題	
			連続:変化:発展		中話題	小話題			

図1 「ナラティブの6つの構成要素」, 「物語の展開の型」, 「話題の推移の型」, 「話題の階層性」の関係

¹ 本研究で分析した接触場面の会話データでは、母語話者が語る長いナラティブを「大話題」として認定した。だが、中井・夏 (2023) で分析した母語場面の会話に現れるナラティブは、いくつかの類似のナラティブが

2.2 ナラティブにおける言語行動と日本語母語話者による調整行動

李（2000）は、日本語母語場面の女性友人同士による雑談の中に見られる物語を会話管理の観点から分析している。会話管理とは、語り手と受け手が物語という活動を成り立たせるために相互に働きかけ合って行うことであるとしている。そして、李（2000）は、物語の「開始」、「終了」、「再開」、「持続」で語り手と受け手が行う言語行動の特徴を明らかにしている（表4）。前掲2.1の表2のように、李（2000）では「物語の展開の型」として「中断」と「流失」を挙げている。だが、「物語の語り手と受け手が行う言語行動」には、「中断」と「流失」が挙げられていない（表4）。それは、物語が「中断」された後に「再開」することから、表4では「物語の受け手の割り込み行動」といった「中断」を「再開」の中に連続したものとまとめてしまっているからであると考えられる。また、「流出」した物語は「再開」しないため、「再開」の中に「流出」は含

表4 物語の語り手と受け手が行う言語行動（李2000: 245）

	物語の語り手が行う言語行動	物語の受け手が行う言語行動
物語を開始するために	1. 話を変える表示をする 2. 話をするための許可を他の会話参加者に求める 3. 話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする 4. 他の会話参加者の興味を引く - a. 出来事の結末を先に言い出す - b. 出来事発生当時の気持を表す - c. 出来事から得た結論を提示する - d. 物語の価値を主張する	1. ある会話参加者（受け手）が他の会話参加者（語り手）に物語を要求する 2. ある会話参加者（語り手）の物語を開始しようという意図を他の会話参加者（受け手）が受け入れ、促す
物語を終了するために	1. 出来事の結末を示す 2. 出来事発生当時の気持を示す 3. 出来事・物語の終了を示す 4. 出来事の題目を示す 5. 出来事から得た結論を述べる 6. 出来事に対する感想・意見を述べる	1. 語り手の発話を理解していることを表す 2. 語り手の発話に対する感想・意見を述べる
物語を再開するために	1. 物語の受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する 2. 挿入連鎖の終結を表示する 3. 物語の語り手・受け手の役割分担を明示する 4. 内容の接続を表示する 5. 物語の続きを思い出そうとしていることを表示する	1. 物語の再開を要求する 2. 挿入連鎖の終結を表示する
物語を持続するために	1. 接続表示 2. 注目要求 3. 時間稼ぎ	1. 語り手の発話を聞いている・理解していることを表す 2. 予測した語り手の後続発話の内容を言い出す 3. 語り手の思い出そうとしているものを提供する 4. 出来事に関連する情報を求める

集まって1つの「大話題」を形成していたため、1つのナラティブを「中話題」とし、その中で「小話題」が展開しているという階層性で捉えた。このように、ナラティブと話題の階層性の関係は、ナラティブの長さだけでなく、類似のナラティブが前後にあるかどうかといった話題の関連性の面からも検討する必要があると言える。

まれないとしていると言える。

上記の李（2000）の物語の語り手と受け手が行う言語行動は、母語話者同士の雑談での物語の分析から見られたものである。だが、母語話者と非母語話者が参加する接触場面の雑談での物語の場合は、非母語話者が会話に参加しやすくなるように母語話者が意図的に行う「調整行動」という観点も考慮に入れて分析するべきである。ファン（1998）では、母語話者と学習者が参加する接触場面において、参加者の言語能力によって言語ホスト・言語ゲストという役割が選択され、両者は会話を続けるために様々な参加調整を行うとしている。表5は、母語話者が言語ホストとして行う参加調整（自己参加調整、他者参加調整）である。

表5 言語ホストとしての参加調整（ファン1998:3）

自己参加調整		他者参加調整	
参加増進 ストラテジー	a. 発話量を増やす b. 相手の身近な話題を提供する c. 話題の発展をコントロールする	参加要請 ストラテジー	a. 同じ質問を複数の参加者に聞く b. 修辭的な質問をする c. 静かな参加者にターンを与える d. 話題の選択権を譲る e. 依頼する
参加緩和 ストラテジー	a. simplified register b. ゆっくり話す c. あいづちのポーズを入れる d. キーワードを強調する e. 自分の発話を繰り返す f. 自分の発話をパラフレーズする g. 例を与える h. 英語にスイッチ i. 文脈をはっきりさせる j. 丁寧に話す k. 発話量を控える	参加支援 ストラテジー	a. 誉める b. 同情する c. あいづち詞を多用する d. 肯定的なフィードバックを多用する e. ノンバーバルのあいづちを多用する f. 相手の発話を続けて完成させる g. 相手の発話を繰り返す h. 相手の発話をパラフレーズする i. 相手の発話を確認する j. 相手の発話を要約する k. 相手の発話を待つ l. あいまいさを許容する m. 誤用を許容する n. 不意の話題変更を受け入れる

さらに、中井（2012）は、日本語母語話者が接触場面で行う調整行動について、会話を円滑に進めるために事前・事中・事後に自身や相手の言語行動等に対して配慮していく歩み寄りの意識と行動であると定義している。そして、接触場面と母語場面の初対面会話等を分析した結果、接触場面では母語話者が語彙、文、発音、発話スピード等の言語レベルだけでなく、発話量、主導権、話題維持、話題管理、話題放棄等の談話レベルでも調整行動を行っている様子が見られたとしている。こうした点から、母語話者の調整行動は、非母語話者の日本語レベルに合わせて、柔軟に行っていくことが重要であると述べている。

2.3 日本語の母語場面と接触場面におけるナラティブの比較研究

佐々木（2010）は、日本語母語場面と日中接触場面（母語話者と中国の大学の日本語上級学習者）における二者会話（女子大生の友人同士）での「体験談」の終結部に着目し、そこに見られる発話連鎖の特徴を分析している。分析の結果、母語場面の終結部では、評価発話やあいづちで先導される発話連鎖で体験談が終結するのが基本的なパターンであったとしている。それに対し、

接触場面では、一定のパターンがなく、評価発話なしで体験談を終了していくことも見られたという。さらに、母語場面の終結部では評価発話が多く用いられ、発話の連鎖が長くなるのに対し、接触場面では評価発話の割合が少なく、あいづちの割合が大きいことが分かったという。

そして、張（2021）は日本語母語場面と日中接触場面（母語話者と日本語上級学習者）の雑談に現れる「会話物語」の終結部とその後続文脈（会話物語に後続する話題）に着目し、日本語母語話者と中国人学習者による後続文脈への展開方法を比較分析している。分析の結果、母語話者は、終結部で評価を挟み、後続文脈で会話の繋がりを保ちながら新たな話題を導入したり、会話物語に先行する前の話題を再開したりすることが多かったという。一方、中国人学習者は、終結部で評価を加えず、後続文脈で物語の内容と一部しか関連しない内容を話題として取り上げることがあり、話題が物語の本筋から外れる方向に変わることがあったと指摘している。

さらに、夏（2020）は、Labov（1972）のナラティブの構造を形成する5つの構成要素（導入部、方向付け部、展開部、結果部、終結部）を参考に、同じ内容と構造のナラティブにおいて日本語母語話者と中国人上級学習者が受け手として行う言語・非言語行動を比較分析している。その結果、母語話者はナラティブの導入部から展開部まではあいづちを打ち、結果部から終結部では短いコメント、情報要求を多く用いて、語り手とともにナラティブを構築していく様子が見られたという。それに対し、中国人上級学習者は、導入部から展開部までは情報提供、情報要求を多用し、結果部から終結部ではあいづちと短いコメントのみ使用しており、母語話者とは異なる傾向が見られたという。このことから、中国人日本語上級学習者は、ナラティブの受け手としてナラティブの構造を意識しつつ、語り手とともにナラティブを構築していくことが難しいと指摘している。

また、中井・夏（2021）では、日本語授業の課外活動として行われる「オンライン会話倶楽部」に参加する2つのグループ（日本語母語話者1人と中級後半レベルの中国人学習者3人）による接触場面の会話の特徴を分析している。分析の結果、1つ目のグループは、学習者達が唐突な話題転換をするものの、自分達が話しやすい話題を提供して話題を発展させながら積極的に会話に参加していたという。2つ目のグループは、母語話者の苦労話に対して学習者からの聞き返しや反応が少なく、話題があまり広がらないため、母語話者が学習者から共感が得られず寂しく感じてしまったという。

一方、中井・夏（2023）では、類似の留学経験を持つ3人の日本語母語話者が語り合う「中国留学中の苦労話」を分析している。そして、母語話者3人がナラティブの協働構築を行うことで、参加者間で親近感、仲間意識が高まり、心が通い合った親しい関係、つまりラポール形成を行うという、中井・夏（2021）で分析した接触場面の会話と異なる特徴を明らかにしている。具体的には、ナラティブの受け手が類似体験の語りや、情報要求、言い換え、同意要求、セリフ発話²等で興味や共感、理解を示したり、2人の語り手が協力しながら語ったりすることで、ラポール

² 山本（2013）は、物語が構築される際に、物語の登場人物の声として聞かれる発話を「セリフ発話」と呼び、受け手による「セリフ発話」は物語の描写の焦点を的確に理解していることを示すとともに、より積極的に物語の構築に貢献すると述べている。

形成が促進されていたとしている。

このように、中国人学習者は、日本語が中級・上級レベルであっても、ナラティブの受け手として、特に導入部から展開部まで情報提供、情報要求を多用する、結果部から終結部で評価発話を用いずに物語を終了させる、または話題転換してしまう等の特徴があり、ナラティブの構造を意識して語り手とともにナラティブを協働構築していくことが難しいと言える。

2.4 先行研究のまとめと本研究の位置づけ

上述の通り、これまでのナラティブに関する研究は、母語場面におけるナラティブの構造、語り手と受け手の言語行動に着目するものが多い。だが、実際の日常会話で交わされるナラティブは、Labov (1972) の6つの構成要素が揃った構造に沿って途切れずに一通り語られるものではなく、その中で小さな話題が展開され、途中から異なる話題へ転換することもある。そのため、ナラティブの構造と其中で展開される話題との関係性を明らかにする必要がある。

また、接触場面のナラティブに関する研究は、母語場面と比較する視点から、語り手と受け手の協働構築に着目するものが多い。だが、母語話者が語り手として、学習者がナラティブの会話に参加しやすくなるように行う調整行動を分析する研究はまだ少なく、詳細に分析する必要がある。さらに、2.3で述べた佐々木(2010)、張(2021)、夏(2020)はいずれも中国人上級学習者を対象としているが、上級に満たない中級後半の学習者に同様の特徴や他の異なる特徴が見られるのかについても分析する必要がある。そして、中井・夏(2021)では、中級後半の中国人学習者が母語話者の苦労話に対して反応をあまりしなかったため、母語話者が寂しく感じてしまったという事例を報告しているが(2.3で述べた2つ目のグループ)、同様に苦労話を語る母語場面の特徴と比べつつ、より詳細な分析が必要である。

以上を踏まえて、本研究では、日本語母語話者が中国人学習者(中級後半)に語る「中国留学中の苦労話」をデータとして分析する³。この会話データでは、学習者が日本語の理解力不足のためにナラティブを中断してしまうが、その後、語り手の母語話者がどのように中断されたナラティブを再開・持続することによって、分割して語るのかという点について、母語話者の調整行動の観点から分析する。そして、受け手の学習者の言語・非言語行動による参加の特徴も考慮に入れ、接触場面における母語話者と学習者のナラティブの協働構築の特徴を明らかにする。

3. 研究方法

本研究の研究方法について述べる。まず、3.1で会話データの収集方法について述べ、次に3.2で会話データの分析方法について述べる。

3.1 会話データの収集方法

会話データは、2020年の7月末に収集した。会話参加者は、日本語母語話者J1と中国人学習

³ この会話データは、中井・夏(2021)で分析した1つ目のグループ(2.3参照)のものである。ただし、中井・夏(2021)では、「中国留学中の苦労話」の後の雑談部分を分析対象としている(4.1で詳細を説明)。

者 C1, C2, C3 (日本語中級後半の終了レベル⁴) である (表 6)。J1 は, 中国に 1 年間留学経験のある日本の大学の学部生であった。C1, C2, C3 は, 日本の大学院に留学予定で, 中国の日本語予備教育受講生であった。なお 4 人は, 日本語授業の一環である「オンライン会話倶楽部」という課外活動⁵に参加し, 週に 1 回程度, 日本と中国をオンラインで繋いで, 自由に会話している知り合いであった。

表 6 会話参加者の背景情報

参加者	年齢	性別	身分	日本語学習歴	留学経験	居住地
J1	20代	女性	学部4年生(中国語専攻)	—	中国1年	日本
C1	20代	女性	日本語予備学校受講生	10ヶ月	なし	中国
C2	20代	男性	日本語予備学校受講生	10ヶ月	なし	中国
C3	20代	女性	日本語予備学校受講生	10ヶ月	なし	中国

まず, 会話データ収集の依頼の際に, 4人に「オンライン会話倶楽部」で話している様子を録画して研究に使わせてもらいたい点を説明した。そして, 4人には, 「録画する会話の話題の1つとして, 母語話者J1の「中国留学中の苦労話」について話してもらいますが, 中国人学習者もその話を聞きながら, 適宜, 話を発展させてもらいたいと思います」という依頼文を日本語と中国語を併記して送付しておいた。このような設定にした理由は, 学習者が受け手としてナラティブにどのように参加しているかを見るためであった。また, J1の「中国留学中の苦労話」を話題としたのは, 中国の生活に関することであり, かつ日本留学準備中の学習者も興味を持って聞いて, 留学の大変さを理解し合うことで, より良い人間関係の形成が促進できると考えたためである。

そして, 当日は, Web会議システムZoom⁶で会話を行い(全27分33秒間), その様子をJ1に録画してもらった(図2)。さらに, 会話データ収集の直後に, 中井(2010, 2012)を参考に, 各会話参加者に「会話感想シート」に, 「会話の全体的な印象」「会話相手の印象」「会話でよかった点」「会話で難しかった点」等について記入してもらった。これらの項目に加え, C1, C2, C3には, 「自身の会話の理解度・その理由」「自分の発話に対するJ1の理解度の推測・その理由」等についても中国語で記入してもらった。その後, 中井(2002, 2012)を参考に, 1週間以内に各参加者にFUIを1~2時間程度行い, 会話中の意識, 感想を尋ねた。FUIは, J1には日本語で, C1, C2, C3には中国語で実施した。

全データ収集後, 各参加者には, 会話データ, FUIのデータ, および, 会話データの静止画等

⁴ 中国人学習者らは, 2020年7月初旬までに予備学校で『中級日本語上』『中級日本語下』(ともに東京外国語大学留学生日本語教育センター(2015a, b))の全ての課を学習済みであったため, 7月末の会話収集日の頃には中級後半終了レベルに達していたと判断される。

⁵ 「オンライン会話倶楽部」に参加する日本語母語話者J1は中国留学経験があるため, 普段参加者4人が会話する際に, 日本と中国の話題について, 日本語と中国語で半分ずつ程度話していたようである(詳細は中井・夏(2021)参照)。そのため, J1と中国人学習者3人の役割(言語ホスト・ゲスト)は, 話題と使用言語によって常に変っていたと考えられる。

⁶ 4人の参加者がパソコン端末でZoomミーティングに参加し, 日本語母語話者のJ1が会議ホストになり, 画廊様式(参加者4人の画面が同時に見える状態)で会話している様子をJ1に録画してもらった。

を研究に使用し、論文に掲載してもよいか確認し、「同意書」に署名をしてもらった上で、回収した。なお、図2は参加者の肖像権に配慮して個人が特定されないように画像処理を行った。

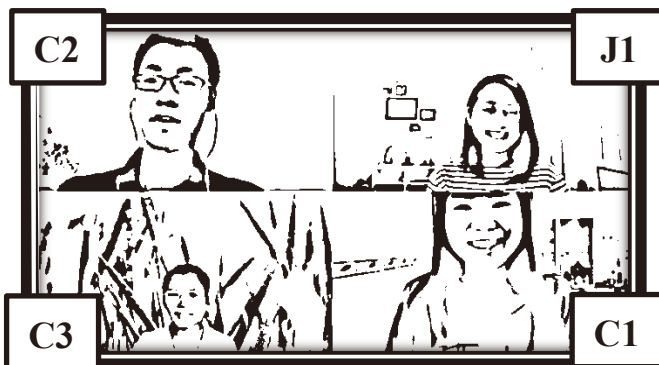


図2 オンラインでの雑談の様子

3.2 会話データの分析方法

まず、中井・夏(2023)を参考に、ナラティブを「日常会話の中で過去の出来事を語るもので、1つ以上の時間的接合点が含まれるもの」と定義し、収集した会話データからナラティブと認定される部分を抽出し、8分29秒間を分析対象とした。次に、Labov(1972)のナラティブの6つの構成要素に、李(2000)の「中断」と「再開」を加えて、それぞれの定義に従い、ナラティブの構成要素の認定を行った。また、特にナラティブの中断の際に展開された別の話題の流れを分析するために、佐藤他(2022)の「会話の中で、導入・展開された内容のまとまりを持った発話の集合体で、その前後に沈黙等の切れ目を示す要素が来るもの」という「話題」の定義、および、「大話題」、「中話題」、「小話題」の認定基準に従い、会話全体の話題認定を行った。さらに、南(1981)に従い、ナラティブ部分の話題の推移の型を認定した。

その後、各ナラティブの構成要素の中で見られた、語り手の母語話者の調整行動、および、学習者の言語・非言語行動による反応の特徴を分析した。語り手の母語話者の調整行動は、李(2000)による「物語の語り手と受け手が行う言語行動」を参考に、ナラティブの進行上の問題が起こる前後に語り手の母語話者が行う言語・非言語行動として捉えなおした。これに加え、接触場面での特徴も見ると、母語話者が言語ホストとして非母語話者が会話に参加しやすくなるように行う参加調整(ファン1998)も、ナラティブで語り手が行う調整行動として扱うこととする。つまり、本研究で分析する、接触場面のナラティブで語り手の母語話者が行う調整行動は、「物語の語り手としての言語行動」(李2000)と「言語ホストとしての参加調整」(ファン1998)の2つの観点を併せたものとする(図3)。

なお、本研究では、李(2000)の「物語」を「ナラティブ」と同義で用いることとする。そして、李(2000)の「物語の語り手と受け手が行う言語行動」では、「中断」と「再開」が一括されて「再開」の言語行動としてのみ示されているが(表4)、本研究では「中断」のための言語



図3 接触場面のナラティブにおける語り手の母語話者による「調整行動」

行動を詳細に分析するため、「中断」と「再開」の言語行動を分けて分析することとする。

以下、「2. 先行研究」で述べた分析の枠組みとして用いる用語には、次の通り、記号を付す。ナラティブの構成要素 (Labov 1972) と物語の展開の型 (李 2000) には【 】を付す。語り手の母語話者が用いる調整行動 (李 2000, ファン 1998, 中井 2012), および受け手の学習者の言語・非言語行動 (李 2000, 表 4) には《 》を付す。なお, 李 (2000) にはないが, 本研究のナラティブの会話データに新たに見られた受け手 (学習者) の言語・非言語行動には, 記述文および会話断片右端の認定結果に「*」印を付して示した。話題の推移の型 (南 1981) には[]を付す。また, 会話断片の文字化表記方法は, 表 7 の通りである。

表7 文字化表記方法 (ザトラウスキー (1993), 中井 (2012) をもとに作成)

。	下降調か平調のイントネーションで文が終了することを示す。
,	ごく短い沈黙, あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句, 副詞, 従属節」等の後に記す。
?	疑問符ではなく, 上昇調のイントネーションを示す。
ー	「ー」の前の音節が長く延ばされていることを示す。
//	// の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。
(1.0)	沈黙の秒数を示す。
{ }	{ } 中の行動は非言語的な行動の「笑い」等を示す。ただし, 発話中に他の参加者のうなずき等の非言語行動が見られた場合は, その発話の中に{うなずき}等と示す。

4. 接触場面におけるナラティブの分析

まず, 4.1 でナラティブ全体の流れの分析を行い, 次に, 4.2 でナラティブにおける母語話者の調整行動と学習者の言語・非言語行動の分析を行う。

4.1 ナラティブ全体の流れの分析

まず, 分析対象とする母語話者による「3. 中国留学中の苦労話」のナラティブが会話全体の中でどこに位置するのかを示すため, 表 8-1 に会話全体の話題の流れをまとめ, 「」に話題開始者を示した。佐藤他 (2022) の話題の定義に従い, ナラティブの中の話題を認定した結果, 8 つの大話題が抽出された。表中の太い線で囲ってある部分が「3. 中国留学中の苦労話」であり, これが 1 つの大話題に当たり, その中に中話題, 小話題が展開していると言える。なお, 「3. 中国留学中の苦労話」の後に発展した雑談部分 (表中の網掛け部分) の詳細な分析は, 中井・夏 (2021) を参照されたい。

表 8-1 会話全体の話題の流れと話題開始者

話題タイトル「話題開始者」		
大話題	中話題	小話題
1. 挨拶「J1」	1-1. 挨拶「J1」	
	1-2. C1さんの調子確認「J1」	
2. 天気「C1」	2-1. J1の所の天気「C1」	
	2-2. C1の所の天気「C1」	
	2-3. C3の所の天気「J1」	
	2-4. C2の所の天気「J1」	
3. 中国留学中の苦労話「J1」	3-1. 留学中の苦労話の宣言「J1」	
	3-2. 中国人の友達を作ること「J1」	
	3-3. 日本人の友達が作れて嬉しい「C1」	
	3-4. 中国語クラスで中国人と話せない「J1」	
	3-5. 日本語予備学校のお手伝い「J1」	
	3-6. 日本人が助けてくれて嬉しい「C1」	
	3-7. 外国人に突然話しかけられたら「J1」	C1の話「J1」 C3の話「J1」 C2の話「J1」
	3-8. 中国人に話しかけたが仲良くなれなかった「J1」	
	3-9. 日本人も中国人も同じ「J1」	
4. 日本人の友達が欲しいか「J1」	4-1. 日本人の友達が欲しい「C1」	
	4-2. 日本人の友達が欲しい「C3」	日本語が下手だから「C3」 日本人の長所を習いたいから「C3」
	4-3. 日本人の友達が欲しい「C2」	若い友達が欲しい「C2」 目上の人と話す心配がある「C2」 若い友達と新しい話題が話せる「C2」
5. 留学の準備「C1」	5-1. コロナの状況「C1」	
	5-2. 留学準備のアドバイス「C1」	
	5-3. 留学荷物の準備「J1」	日本の天気「C3」
6. ハンコ「C2」	6-1. ハンコの意味確認「C2」	
	6-2. 日本に行くのにハンコが必要「J1」	
	6-3. 中国ではサイン「J1」	
	6-4. ハンコを買う「J1」	
	6-5. 中国でのハンコ「J1」	必要とされる場所「C1」
	6-6. サイン文化「J1」	
	6-7. ハンコの数「C1」	
	6-8. ハンコ材料「C1」	ガラスのハンコ「C1」 牛の角のハンコ「J1」
7. 牛の角「C2」	7-1. 牛の角の言い方「C2」	
	7-2. 牛の角のメリット「C2」	
	7-3. 日本の牛の角「C1」	
	7-4. 牛の角は材料としていい「C1」	
8. 挨拶「J1」	8-1. お礼「J1」	
	8-2. 挨拶「J1」	

次に、「3. 中国留学中の苦労話」のナラティブ全体の流れを見るため、ナラティブの構成要素、および、話題の流れ（話題の番号とタイトル、話題の推移の型、話題開始者）を表 8-2 にまとめた。ここで示したナラティブの構成要素は、表 8-1 で示した大話題「3. 中国留学中の苦労話」の中で展開される中話題に当たるが、本研究では「3. 中国留学中の苦労話」というナラティブの部分のみ、分析対象として扱うため、以下これらを「話題」と呼ぶこととする。

そして、ナラティブの構成要素を見ると、J1 による「3. 中国留学中の苦労話」というナラティブの中に、C1 による短いナラティブ（3-3 と 3-6）が挿入されることで、2 回の中断（表中網掛け部）が見られ、J1 がそれを受け入れて、C1 によって中断された自身のナラティブを再開・持続することで、3 つの部分に分割して少しずつ語っている様子が観察された。なお、C1 による短いナラティブ（3-3 と 3-6）は、大話題に認定するほど階層性がある包括的なものではないため、大話題「3. 中国留学中の苦労話」のナラティブに挿入された中話題として認定することとした。

表 8-2 大話題「3. 中国留学中の苦労話」のナラティブの構成要素と話題（中話題）の流れ

ナラティブの構成要素	話題の番号とタイトル（発話番号）	話題の推移の型	話題開始者
導入部	3-1. 留学中の苦労話の宣言（35～36）	新出	J1
方向付け部	3-2. 中国人の友達を作ること（37～42）	発展	J1
中断 I	3-3. 日本人の友達が作れて嬉しい（43～49） (C1 の短いナラティブ挿入)	発展	C1
再開, 展開部	3-4. 中国語クラスで中国人と話せない（50～53）	回帰	J1
結果部・評価	3-5. 日本語予備学校のお手伝い（54～57）	発展	J1
中断 II	3-6. 日本人が助けてくれて嬉しい（58～65） (C1 の短いナラティブ挿入)	発展	C1
	3-7. 外国人に突然話しかけられたら（66～129） C1 の小話題→C3 の小話題→C2 小話題	新出	J1
再開, 結果部	3-8. 中国人に話しかけたが仲良くなれなかった (130～134)	再出	J1
終結部・評価	3-9. 日本人も中国人も同じ（135～142）	発展	J1

母語話者 J1 による「3. 中国留学中の苦労話」の話題の推移の型と話題開始者を見ると、まず、J1 は「3-1. 留学中の苦労話の宣言⁷」という話題を開始し、ナラティブの【導入部】を語った[新出]。そして、ナラティブの【方向付け部】として、「3-2. 中国人の友達を作ること」について語った[発展]。それに対して、学習者 C1 が「3-3. 日本人の友達が作れて嬉しい」という話題を開始して、自分の短いナラティブを話したため、ナラティブの【中断 I】が生じた[発展]。

その後、J1 がナラティブを【再開】し、【展開部】として「3-4. 中国語クラスで中国人と話せない」という話題を話した[回帰]。さらに、ナラティブの【結果部・評価】として「3-5. 日本語予備学校のお手伝い」という話題を語った[発展]。それに対して、学習者 C1 は再び「3-6. 日本人が助けてくれて嬉しい」と自分の短いナラティブを話したため、再びナラティブの【中断 II】が生じた[発展]。そこで、J1 は自分の苦労話の続きを話すきっかけを作るために、「3-7. 外

⁷ 話題 3-1「宣言」は、ナラティブ全体を開始する宣言であり、話題 3-2 以降とまとめて 1 つの話題とすることができなかったため、1 つの独立した「まとまり」を持つ話題として認定した。

国人に突然話しかけられたら」という話題を開始し、C1、C3、C2の順に自分達の意見を小話題で話させた[新出]。

そして、J1は再び自分のナラティブの【結果部】の続きを【再開】し、「3-8. 中国人に話しかけたが仲良くなれなかった」という話題を話した[再出]。最後に、「3-9. 日本人も中国人も同じ」という話題で、ナラティブの【終結部・評価】を語って終了させた[発展]。

このように、ナラティブの2回の中断は、いずれも学習者が自分の短いナラティブを開始したためであった。

4.2 ナラティブにおける母語話者の調整行動と学習者の言語・非言語行動の分析

ナラティブの中断に対して語り手のJ1がどのような調整行動を行っていたのか、および受け手の学習者の言語・非言語行動による反応の特徴について、会話断片の具体例を挙げながら質的分析を行う。なお、会話断片の右端に、李(2000)の言語行動と、ファン(1998)の調整行動に当てはまるものをそれぞれ記す。

4.2.1 ナラティブの【導入部】、【方向付け部】、【中断I】

断片(1)は、J1が自分の「3. 中国留学中の苦労話」について【導入部】、【方向付け部】で語っている部分である。これは話題の推移の型で見ると、J1による「話題3-1: 留学中の苦労話の宣言」が[新出]し、「話題3-2: 中国人の友達を作ること」とC1による「話題3-3: 日本人の友達が作れて嬉しい」の2つの話題の[発展]の部分である。

まず、話題3-1の35でJ1が「留学の苦労した話をする」と述べ、《話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする》ことでナラティブの【導入部】開始を明示する調整行動を行う。これはJ1が言語ホストとして《話題の発展をコントロールする》という調整行動を用いているとも言える。そして、36でC1があいづちを打つことで《語り手の物語を開始しようという意図を受け入れ・促す》。その後、J1が話題3-2の37、41で「一番苦労したことは「中国人の友達を作ることでした」と語り、【方向付け部】で《出来事の結末を先に言い出す》という調整行動を行う。それに対し、J1の37の発話に重なる形でC1が38で「いいです」と言い、学習者3人とも39、40でうなずきをすることで《聞いている・理解していることを表す》という言語・非言語行動を行うが、42で2.0秒の沈黙が生じる。その後、話題3-3の43と45でC1が「私達は日本人の友達を作ることが嬉しい」と述べ、《自分の類似体験を語る^{*}》という言語行動を行う。それに対して、J1が44と46であいづち、笑いと共に「私も嬉しいです」と感想を述べ、《受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する》、相手による《不意の話題変更を受け入れる》という調整行動を行っている。さらに、J1の発話を受け、C3が47で「私も嬉しいー」と共感を示している。それに対して、J1が48で「やったー」と反応し、《出来事に対する感想・意見を述べる》様子が見られた。さらに、J1が言語ホストとして学習者が話す際に、《ノンバーバルのあいづちを多用する》、《肯定的なフィードバックを多用する》といった調整行動を用いていた。この話題3-3はC1が日本人の友人を作れて嬉しいという自分の類似体験を語る話題であり、直

前の J1 の中国人の友人が作れなかったという苦労話の話題 3-1, 3-2 と若干の関連はあると言える。だが, J1 の一連のナラティブの構造から考えると, 【方向付け部】の途中でナラティブが中断してしまっていると言える (【中断 I】)。

この部分を FUI で確認したところ, C2 と C3 は苦労という言葉の意味が分からず, すぐ反応できなかったため, 42 で沈黙が生じたことが分かった。また, 43 で C1 が自分の類似体験を語ったのは J1 が長いナラティブを話そうとしていることを理解しておらず, 関連した自分のことを

断片 (1) ナラティブの【導入部】、【方向付け部】、【中断 I】

「話題 3-1: 留学中の苦労話の宣言」【導入部】【新出】		李 (2000) 言語行動	ファン (1998) 参加調整
35	J1 じゃあ今日はー, トピックとしてー, 私の留学の, 苦労した話を, するということ {笑い} なので, (1.5) していきます // ねー。	話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする	話題の発展をコントロールする
36	C1 はい。あ, はい, わ,	語り手の物語を開始しようという意図を受け入れ・促す	
「話題 3-2: 中国人の友達を作ること」【方向付け部】【発展】			
37	J1 私 // 去年ー, 1 年留学してたんですけど,	出来事の結末を先に言い出す	
38	C1 いいです。	聞いている・理解していることを表す	
39	C2 {うなずき}		
40	C1, 2, 3 {うなずき}		
41	J1 その中でー, 一番苦労したこと, といえば, 中国人の, 友達を {C1: うなずき} 作ることでした。	出来事の結末を先に言い出す	
42	- (2.0)		
「話題 3-3: 日本人の友達が作れて嬉しい」【中断 I】【発展】			
43	C1 はい, {C2: うなずき} 私達は, {J1, C1: うなずき} うーん, 今日, うん, ああ, 去年は, {J1: うなずき} えー, 日本語を 1 年に, {J1: うなずき} え, 勉強し, 勉強し, {J1: うなずき} て, んー, 日本人の, {J1: うなずき} あ, 友達を, {J1: うなずき} 友達も {J1: うなずき} 作るのが, {J1: うなずき} たいへ, 大変うれしいです。	自分の類似体験を語る*	(語り手 J1 による) ノンバーバルのあいづちを多用する
44	J1 あっ,	受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する	不意の話題変更を受け入れる
45	C1 J1 さんと, J1 さんと一緒に会話を {笑い} すれ, んー, 会話をするのは, んー, 嬉しいです。	自分の類似体験を語る*	
46	J1 あー, 私も嬉しいです。{笑い}	受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する	肯定的なフィードバックを多用する
47	C3 えー私も嬉しいー。	語り手の発話に対する感想・意見を述べる	
48	J1 あー, やったー。{笑い}	出来事に対する感想・意見を述べる	肯定的なフィードバックを多用する
49	C1, 2, 3 {笑い}	聞いている・理解していることを表す	

話そうとしたからだという。これに対して、J1は自分が話した内容についてのコメントではないようだが、反応してくれたことはありがたく、このまま話し続けてもよいと感じたという。このように、J1は、ナラティブの【方向付け部】でC1が別の話題に発展させたことを受容し、自身のナラティブの中断を一旦受け入れ、その後、ナラティブの続きを語ろうとしていた。

4.2.2 ナラティブの【再開】、【展開部】、【結果部・評価】、【中断II】

断片(2)は、J1が苦労話を【再開】し、その【展開部】、【結果部・評価】を語る部分である。これを話題の推移の型で見ると、J1の留学中の「話題3-4: 中国語クラスで中国人と話せない」に【回帰】し、さらに「話題3-5: 日本語予備学校のお手伝い」に【発展】して、C1による「話題3-6: 日本人が助けてくれて嬉しい」に【発展】した部分である。

まず、50でJ1が「なんかー」と発話して、《物語の続きを思い出そうとしていることを表示する》ことでナラティブを【再開】し、【展開部】として50、52で話題3-4の中国語クラスでは外国人ばかりで中国人と話することができないということを詳細に語っている。また、学習者が理解しやすくなるように52で「外国人しかいなかった」と《自分の発話をパラフレーズする》ことも行っている。それに対して、C1とC2がそれぞれ50～53でうなずきを行い、特にC1が51で驚いた表情を示し《聞いている・理解していることを表す》という非言語行動を行っている。その後、J1が話題3-5の54で「なんですけど」という《接続表示》を使ってナラティブの【結果部・評価】を続けて語る。しかし、55で2.0秒の沈黙があり、その後C1が56で「いいですねー」と《語り手の発話に対する感想・意見を述べる》という言語行動を行う。そして、話題3-6の58、60でC1が再び《自分の類似体験を語る^{*}》という言語行動を行う。それに対して、59、61でJ1があいづちを打ち、63で「助けになってれば、私も嬉しいです」と自分の感想を述べ、《受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する》という調整行動を行い、言語ホストとして相手による《不意の話題変更を受け入れる》ことと、学習者が話す際に、《ノンバーバルのあいづちを多用する》ことを行っている。

この話題3-6はC1が予備学校で日本人の友人に手伝ってもらって日本語力が向上したという自分の類似体験を語る話題であり、直前のJ1の中国人と話す機会がなかったが予備学校で中国人学生の日本語の手伝いができたという苦労話の話題3-4、3-5と若干の関連はある。だが、J1の一連のナラティブの構造から考えると、【結果部・評価】の途中でナラティブが中断してしまっていると言える（【中断II】）。この部分をFUIで確認したところ、C1は「J1の話を聞いて、自分達も日本人留学生からたくさん助けてもらったことを伝えたかった」ため、58、60でそのことを言ったという。それに対し、FUIでJ1はC1が自分の話を始めたため、「自分のナラティブのまだ途中だったが、最後に伝えたかったことだったので、とてもいい流れだと思った」と述べていた。つまり、ここでJ1はC1による類似の短いナラティブを受け入れ、自分のナラティブの《話題放棄》を一旦行い、学習者の話を促すことで《会話維持》を図っていると言える。

断片 (2) ナラティブの【再開】、【展開部】、【結果部・評価】、【中断 II】

「話題 3-4：中国語クラスで中国人と話せない」 【再開】【展開部】【回帰】		李 (2000) 言語行動	ファン (1998) 参加調整
50	J1 なんかー、私ー、の行ってた大学で、中国語の、私は中国語を勉強するために、大学、留学したので、(1.5) {C2: うなずき}あの一、学校の中に、外国人しかいませんでした。	物語の続きを思い出そうとしていることを表示する	
51	C1 {うなずき、驚いた顔}	聞いている・理解していることを表す	
52	J1 授業の中に、外国人しか、いなかったの、中国人の方と、会話するきっかけが、{C1: うなずき}ほほありませんでした。		自分の発話をパラフレーズする
53	C2 {うなずき}	聞いている・理解していることを表す	
「話題 3-5：日本語予備学校のお手伝い」【結果部・評価】【発展】			
54	J1 なんですけど、途中から、{C1: うなずき}あ、皆さんが行っていた、日本語予備学校で、(1.5) {C1: うなずき}お手伝いのできるようになったのでー、とてもー、いい{C1: うなずき}きっかけでした。私もー、すごい嬉しかったです。	接続表示	
55	- (2.0)		
56	C1 あー、//いいですね//ー。	語り手の発話に対する感想・意見を述べる	
57	J1 {うなずき} はい。{笑い}		
「話題 3-6：日本人が助けてくれて嬉しい」【中断 II】【発展】			
58	C1 あ、私達も、{J1: うなずき}予備学校で、んー、日本人、日本人の学生、{J1: うなずき}から、{J1: うなずき}んー、いろいろな、あ、お手伝いを{J1: うなずき}もらいました、{J1: うなずき}んー、もらいました。	自分の類似体験を語る*	(語り手 J1 による) ノンバーバルのあいづちを多用する
59	J1 あっ、そうなん//ですねー。	受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する	不意の話題変更を受け入れる
60	C1 う、はい、日本語が、だんだん上手になります、なります。	自分の類似体験を語る*	
61	J1 あっ、本当ですか。	受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する	
62	C1 ええ。		
63	J1 ちょっとでも、助けになってれば、私も嬉しいです。	受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する	
64	- (2.5)		
65	C1,2 はい。	聞いている・理解していることを表す	

4.2.3 ナラティブの【中断 II】、【再開】、【結果部】、【終結部・評価】

断片 (3) は J1 のナラティブが中断された後、J1 がナラティブを分割し、学習者 3 人に質問を投げた意見を話させた後、ナラティブを【再開】し、【結果部】と【終結部・評価】を語る部分である。これは話題の推移の型で見ると、J1 による「話題 3-7: 外国人に突然話しかけられたら」

が〔新出〕した後、J1の「話題3-8: 中国人に話しかけたが仲良くなれなかった」という「苦労話」と関連付けた話題が〔再出〕し、「話題3-9: 日本人も中国人も同じ」に〔発展〕した部分である。

まず、断片(2) 話題3-6の58-65でJ1のナラティブが中断された後、断片(3)の話題3-7の66, 69, 71でJ1が学習者3人に「外国人から話しかけられたらどう思いますか」と質問し、言語ホストとして《静かな参加者にターンを与える》、《同じ質問を複数の参加者に聞く》という調整行動を行い、3人の学習者にそれぞれ自分の意見を話させている。この部分についてJ1はFUIで、「3人に予め質問を投げかけて、これから自分の苦労話を話すきっかけを作り、3人が理解しやすくなるようにした」と述べていた。つまり、J1が自身のナラティブの《話題放棄》をして一旦中断し、少し異なる《話題選択》を行って質問することで、学習者に意見や経験を話させて《会話維持》をしつつ、その学習者が話した話題に関連付けて、再度、《話題選択》を行って自身の苦労話に戻して、そこに学習者を参加させようとしていると言える。

そして、各学習者に意見を話させた後、話題3-8の130でJ1が「なんか」と発話して《物語の続きを思い出そうとしていることを表示する》、《話題の発展をコントロールする》という調整行動を行い、自分の苦労話の【結果部】を【再開】したが、131でC1のみうなずきをする。さらに、132でJ1が中国人に話しかけても、相手が緊張して仲良くなれなかったことを詳しく語っている。ここでは、J1が「だけど」という《接続表示》を使用し、自分のナラティブを持続させ、「仲良くなれませんでした」と結論を語っている。しかし、133でまた2.0秒の沈黙が生じ、134でC1, C2, C3のうなずきが見られる。その後、J1が話題3-9の135で《出来事に対する感想・意見を述べる》(【終結部・評価])が、136で再び3.0秒の沈黙が見られたため、137でJ1が出来事から得た結論を話す。ここで、J1による《出来事に対する感想・意見を述べる》《出来事から得た結論を述べる》という調整行動が見られる。これは、沈黙が生じた際、J1が自分の《発話量を増やす》ことによって会話を継続させたとも解釈できる。その後、138で再度2.0秒の沈黙があり、J1が《相手の発話を待つ》ことを行ってから、139, 141でC1が自分の《語り手の発話に対する感想・意見を述べる》という言語行動を行っている。ただし、この感想はJ1が話題3-8で語ったことと直接関係していないように見えるが、140, 142でJ1があいづちとうなずきを行い、言語ホストとして相手の《不意の話題変更を受け入れる》、《ノンバーバルのあいづちを多用する》という調整行動を行っている。

この部分についてJ1はFUIで、「皆さんが意味が分からなかったかなと不安を感じた」と述べていた。一方、C1は「まだ母語話者のように良いタイミングで反応できない」、C2は「J1が続けて語ると思い、反応をしなかった」、C3は「意味をきちんと理解できず、反応の仕方が分からなかった」ため、沈黙になったと述べていた。また、137でJ1が結論を述べたのは、「沈黙になると学習者がまた違う話題を始めてしまうかもしれないから何とかその話について話そうとした」からだという。そして、139, 141でC1が述べた感想がJ1のナラティブと直接関係していなかったため、J1は「今した話は伝わっていなかったと気づいた」と述べていた。つまり、ここではJ1が《会話維持》をして【終結部】を終わらせるために、自分のナラティブに対して自身で感想や結論を述べ、うなずいていたと言える。

断片 (3) ナラティブの【中断Ⅱ】、【再開】、【結果部】、【終結部・評価】

「話題 3-7：外国人に突然話しかけられたら」 【中断Ⅱ】【新出】		李 (2000) 言語行動	ファン (1998) 参加調整
66	J1	あと一, (1.5) 1つ, 質問があるんですけど一,	静かな参加者にターンを与える
67	-	(1.5)	
68	C1	え, はい, {C3: うなずき} どうぞ. {笑い}	
69	J1	皆さんが一, 中国で一, 生活して一, 突然一, 外国人から一, 話しかけられたら一, どう思いますか一。	
70	-	(1.5)	
71	J1	C1// さん, どう思いますか。 (以下中略)	同じ質問を複数の参加者に聞く
「話題 3-8: 中国人に話しかけたが仲良くなれなかった」【再開】【結果部】【再出】			
130	J1	なんか, 私は一, 留学中に一, 中国人の友達ができなかったので一, あの一, 学生に, 突然話しかけて行って一,	物語の続きを思い出そうとしていることを表示する
131	C1	{うなずき}	聞いている・理解していることを表す
132	J1	あの, 中国語を話したりしていました。だけど一, その話しかけた, その中国人の方は一, すごい, 驚いて一, 緊張して一, {C1: 表情を変える} あまり, 仲良くなれませんでした。	接続表示
133	-	(2.0)	
134	C1, 2, 3	{うなずき}	
「話題 3-9：日本人も中国人も同じ」【終結部・評価】【発展】			
135	J1	なので一, そう, すごい大変だったな一って一いう思いがあります。	出来事に対する感想・意見を述べる
136	-	(3.0)	
137	J1	だけど一, 日本人も同じなので一, 今考えれば一, やっぱみんな緊張しますよね。	出来事から得た結論を述べる
138	-	(2.0)	相手の発話を待つ
139	C1	うーん, {C2: うなずき} はい, うーん, はじめ, はじめは一, {J1: うなずき} うーん, みんな一, あ一, みんな多分, ん, 緊張して一, {J1: うなずき} え, 緊張しています。でも一,	語り手の発話に対する感想・意見を述べる
140	J1	だよ // ね. {笑い}	不意の話題変更を受け入れる
141	C1	ん一, あ一, たくさん会話をすれば一, {J1: うなずき} え一, だんだん慣れて, {J1: うなずき} え, なる, {J1: うなずき} 慣れる, に, {J1: うなずき} ようになります。	(語り手J1による) ノンバーバルのあいづちを多用する
142	J1	{うなずく}	

5. 総合的な考察と双方の調整行動の必要性

本節では、上記の会話データの分析結果を踏まえて、5.1で総合的な考察、5.2で接触場面での双方の調整行動の重要性について述べる。

5.1 総合的な考察

今回収集した接触場面のナラティブには2回の中断が見られ、いずれも母語話者J1の「3. 中国留学中の苦労話」の途中で学習者が割り込み、自分の類似体験を語ったことが原因になっていた。そして、学習者には、李(2000)で受け手の母語話者が行くとされる、《予測した語り手の後続発話の内容を言い出す》、《出来事に関連する情報を求める》等の言語行動を行う様子は全く見られなかった。さらに【終結部】でナラティブと直接関連しない感想を述べたことから、《語り手の発話に対する感想・意見を述べる》という言語行動も十分にできていなかったと言える。これは、佐々木(2010)、張(2021)等でも指摘されている、受け手の学習者が語り手のナラティブに対して評価をせずに話題を変えていく傾向と共通する。

こうした点は、中井・夏(2023)で分析した母語場面の「中国留学中の苦労話」の分析では見られなかった特徴である。同様の話題「中国留学中の苦労話」について話す母語場面では、母語話者3人が類似体験を語る、情報要求、言い換え、同意要求、セリフ発話等で興味や共感、理解を示す、2人の語り手が協力しながら語る等のナラティブの協働構築によってラポール形成を行う様子が見られたものの、今回の接触場面で見られたようなナラティブの受け手の割り込みによる中断は見られなかった。

ここから、学習者にとって母語話者が語る長いナラティブの構造を把握し、適切な反応をすることは難しいと言える。実際に、大話題1～8の中で(前掲の表8-1)、母語話者が長いナラティブを語ったのは大話題3のみであるが、大話題3だけ学習者による理解が難しく、学習者が適切な反応をする代わりに、大話題からずれた内容の、自分の類似体験に関する短いナラティブを語ったため、それが母語話者のナラティブの中断となってしまった。

だが、J1はナラティブが中断される際に、《受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する》、《静かな参加者にターンを与える》等の調整行動を行い、自分のナラティブを再開することで分割して語る様子が見られた。表9にナラティブの各構成要素において、母語話者J1が語り手として行った調整行動をまとめた。なお、李(2000)の語り手が行う言語行動とファン(1998)の参加調整の両方で認定できたものは同じ行に併記する。これにより、ナラティブの会話管理と言語ホストとしての参加調整という両観点から、接触場面のナラティブにおける母語話者の語り手としての調整行動を捉えることができる。

表9に示したように、母語話者のJ1は、李(2000)による語り手が行う言語行動の他に、言語ホストとして学習者が会話を理解して参加しやすくするための《話題の発展をコントロールする》、《不意の話題変更を受け入れる》、《ノンバーバルのあいづちを多用する》、《肯定的なフィードバックを多用する》、《自分の発話をパラフレーズする》、《静かな参加者にターンを与える》、《同じ質問を複数の参加者に聞く》、《発話量を増やす》、《相手の発話を待つ》(ファン1998)といった調整行動を行っていたことが分かる。さらに、話題の流れから見ると、J1が学習者達の日本語理解と会話への参加を図りながら、中断されたナラティブを2回再開して語っていた。これは、中断されたナラティブの《話題放棄》を一旦して《会話維持》を図り、その後、《話題選択》してナラティブを再開するという談話レベルの調整行動(中井2012)を行っていたとも言える。

表9 本研究の苦労話のナラティブに見られた母語話者（語り手）の調整行動

ナラティブの構成要素	語り手が行う言語行動（李 2000）	言語ホストの参加調整（ファン 1998）
導入部	・話をしようとする意欲を他の会話参加者にアピールする	・話題の発展をコントロールする
方向付け部	・出来事の結末を先に言い出す	
中断Ⅰ	・受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する	・不意の話題変更を受け入れる
		・ノンバーバルのあいづちを多用する ・肯定的なフィードバックを多用する
再開・展開部	・物語の続きを思い出そうとしていることを表示する	・自分の発話をパラフレーズする
結果部・評価	・接続表示	
中断Ⅱ	・受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する	・不意の話題変更を受け入れる
		・静かな参加者にターンを与える ・同じ質問を複数の参加者に聞く
再開・結果部	・物語の続きを思い出そうとしていることを表示する ・接続表示	・話題の発展をコントロールする
終結部・評価	・出来事に対する感想・意見を述べる ・出来事から得た結論を述べる	・発話量を増やす
		・相手の発話を待つ
		・不意の話題変更を受け入れる
		・ノンバーバルのあいづちを多用する

このように、母語場面と異なり、接触場面では語り手が自身のナラティブを構築するための調整行動だけでなく、学習者の日本語能力に留意し、会話に参加できるようにするための言語ホストとしての調整行動を行うことも重要であると言えよう。

5.2 接触場面での双方の調整行動の重要性

以上の考察から、接触場面では学習者の日本語の理解力不足のため、母語話者が長いナラティブを語ることが難しい場合がある。そうした場合、母語話者が中断された自分のナラティブを分割しながら語ることによって、学習者に理解する時間を与えたり発話させたりすることができると考えられる。ここから、母語話者側が学習者の日本語レベルに合わせて、発話量や話題提供を調整することの重要性も見えてくる。こうした調整行動は、母語話者が学習者にナラティブを語る際に必要なことであり、ナラティブを共に構築しつつ人間関係を形成していく上で重要であると言える。

なお、母語話者 J1 によると、普段「オンライン会話倶楽部」で集まる際は、J1 が学習者 C1, C2, C3 に質問をして話させ、自身が受け手になることが多かったとのことである。そのため、学習者が主に語り手として雑談の話題を自分達に引き付けて積極的に話すことに慣れていた可能

性がある。そうした中、J1が自身のナラティブを語っても、学習者達が理解できずに、その話題が流失してしまうことも多かったのかもしれない。

だが、今回は、本研究の会話データ収集のために、J1が語り手となって自身の「苦労話」を3人の学習者達に語るという指示がされていた。その指示に従って、J1が最後まで自身の苦労話を語ろうと努力したが、学習者がナラティブの受け手として参加することに慣れておらず、J1の語りを理解して反応できなかったため、沈黙やナラティブの中断が起こってしまったと考えられる。一方で、母語話者J1の視点から見ると、自分の苦労話を語る際に1つのまとまったものとして結末まで語る欲求も沸き、学習者達からの理解や共感を得るために結末まで語りながら調整行動を行っていたのではないかと考えられよう。

ここから、学習者側がいつも質問されて自身の話をするだけでなく、時には母語話者のまとまりのあるナラティブも聞いて理解しつつ、適切な反応をして共感や理解を示すといった、ナラティブの協働構築をしながら会話に積極的に参加していけるようになることも、母語話者とともに対等に会話に参加していくためには必要であると言えよう。そして、学習者もナラティブの受け手になる際に、ナラティブの構造を知り、語り手の話に対して共感を示したり、聞いている・理解していることを表したりすることによって、ナラティブを促す必要があると言えよう。また、ナラティブの終結部でナラティブと関連した感想・意見を述べることも重要であろう。これらを踏まえて、日本語の会話教育において、ナラティブの構造、および、受け手としての言語・非言語行動を指導項目として扱う必要があると言える。

6. まとめと今後の課題

以上、本研究では接触場面において、ナラティブの語り手の日本語母語話者が受け手の中国人日本語中級学習者に、自身のナラティブを理解して参加させるために行うナラティブの分割に焦点を当て、その前後に行われる母語話者の調整行動の特徴と、学習者が受け手として行う言語・非言語行動の特徴を分析した。

その結果、接触場面のナラティブにおいて、言語ホストとなる母語話者は語り手として、1つのナラティブが中断された際に、分割しながら語り、《受け手側の割り込み行動における発話内容を肯定する》、《静かな参加者にターンを与える》等の調整行動を行っている様子が見られた。ここから、母語話者と学習者がより良い人間関係を形成できるように、接触場面のナラティブにおいて、母語話者が学習者の言語行動・非言語行動に合わせて、調整行動を行っていくことが重要であると言える。これにより、学習者もナラティブに参加しやすくなり、母語話者とともにナラティブを協働構築していくことが可能になると考えられる。一方、学習者の方は、受け手としてナラティブの構造を十分に理解できずに中断して語り手の母語話者を不安にさせてしまい、思う存分ナラティブを語ってもらうことが難しかったようである。ここから、日本語教育では、学習者が母語話者の語り手のナラティブの構造を掴んで、ナラティブを協働構築していけるようになるための指導も必要であると考えられる。例えば、ナラティブの各構成要素で語られている内容を聞き取って要約する練習を行うことも有効であろう。その上で、ナラティブの終了部で、コ

メントや質問をすることで聞いている・理解していることを表したり、語り手のナラティブと強く関連している話題を提示したり自分の類似体験を語ったりすることで共感を示す練習を行うのがよいだろう。このような母語話者と学習者双方によるナラティブの協働構築がより良い人間関係の形成を促進させることに繋がるのではないかとと言える。

ただし、本研究では、日本留学経験のない中国人中級後半学習者が参加する、内容が指示された会話データを1つのみ分析した。また、本研究で分析対象としたデータは、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、オンラインでの会話データ収集となったため、会話参加者の言語・非言語行動もある程度制限されて、沈黙が起きやすい環境であったと考えられる。今後は異なるレベルの学習者が参加する対面・オンラインの会話データを収集し、特に日常会話に現れる自然なナラティブも分析していきたい。そして、接触場面におけるナラティブの協働構築について、日本語会話教育や母語話者教育の両面で取り上げていきたい。それによって、母語話者と学習者のより良い人間関係の形成に寄与することを目指したい。

参考文献

- 夏雨佳 (2020) 「日本語母語場面と日中接触場面における「ナラティブ」の受け手が行う言語・非言語行動に関する分析—フォローアップ・インタビューによる語り手と受け手の意識の考察から—」『第29回小出記念日本語教育研究会予稿集』 28-29.
- 夏雨佳・中井陽子 (2021) 「接触場面のナラティブで語り手の母語話者が行う中断による分割—受け手の中国人日本語中級学習者のための調整行動として—」『社会言語科学会第45回大会発表論文集』 164-167.
- 佐々木泰子 (2010) 「接触場面と母語場面—体験談の終結部から見たその特徴—」『言語文化と日本語教育』 39: 33-40. <http://hdl.handle.net/10083/52010>
- 佐藤菜奈花・夏雨佳・中井陽子 (2022) 「日中初対面接触場面の二国会話と三国会話に関する事例分析—話題開始の発話とフォローアップ・インタビューから見る非母語話者の理解・参加の比較—」『社会言語科学』 24(2): 21-36. https://doi.org/10.19024/jajls.24.2_21
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』 東京: くろしお出版.
- ザトラウスキー, ポリー (2003) 「日本語の会話での話題・エピソード・発話連鎖について」ザトラウスキー, ポリー・須々木香枝・中井陽子・渡辺文生・木戸光子「パネルセッション: 認知・相互作用・人間関係からみた日本語の会話における話題・エピソード・発話連鎖」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 227-229.
- 張未未 (2021) 「日本語の会話物語の後続文脈への展開方法—日本語母語場面と日中接触場面の相違—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』 28(2): 231-242. <http://hdl.handle.net/2065/00074923>
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2015a) 『中級日本語 上』 東京: 凡人社.
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (2015b) 『中級日本語 下』 東京: 凡人社.
- 中井陽子 (2002) 「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係—フォローアップ・インタビューをもとに—」『群馬大学留学生センター論集』 2: 23-38.
- 中井陽子 (2010) 「第2章作って使う 第4節会話授業のさまざまな可能性を考える」尾崎明人・椿由紀子・中井陽子 (著) 『日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る』 135-188. 東京: スリーエーネットワーク.
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』 東京: ひつじ書房.
- 中井陽子・夏雨佳 (2021) 「談話技能教育における「研究と実践の連携」の循環プロセス—中国人日本語学習者と日本人学生が参加するオンライン会話倶楽部の活用焦点を当てて—」『東京外国語大学国際日本学研究』 創刊号: 84-102. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/100121>
- 中井陽子・夏雨佳 (2023) 「ナラティブの協働構築によるラポール形成—母語話者による留学中の苦勞話の語りを通して—」『国立国語研究所論集』 24: 89-112. <http://doi.org/10.15084/00003689>

- 西川玲子 (2005) 「日常会話に起こるナラティブの協働形成—理論構築活動としてのナラティブ—」『社会言語科学』7(2): 25-38. https://doi.org/10.19024/jajls.7.2_25
- ファン, サウクエン (1998) 「接触場面における言語管理」『国立国語研究所「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」研究会 発表原稿・会議要録』1-16.
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移: 松江テキストを資料として」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会 (編) 『藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢 I 方言研究の推進』87-112. 東京: 三省堂.
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」『日本語教育』103: 49-58.
- 柳田直美 (2015) 『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して—』東京: ココ出版.
- 山本真理 (2013) 「物語の受け手によるセリフ発話—物語の相互行為的展開—」『社会言語科学』16(1): 139-159. https://doi.org/10.19024/jajls.16.1_139
- 李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究 会話管理の観点から』東京: くろしお出版.
- Labov, William (1972) The transformation of experience in narrative syntax. *Language in the inner city*, 354-396. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Maynard, Senko K. (1989) *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex.
- Tannen, Deborah (1984; 2005) *Conversational style: Analyzing talk among friends*. New York: Oxford University Press.

Adjustments by a Native Speaker during a Narrative in a Contact Situation: Collaborative Construction with Chinese Intermediate Learners of Japanese

XIA Yujia^a

NAKAI Yoko^b

^aGraduate Student, Tokyo University of Foreign Studies / Project Collaborator, NINJAL

^bTokyo University of Foreign Studies / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This study explores how a native speaker and learners of Japanese collaboratively construct narratives, focusing on adjustment by the native speaker. The conversation data consist of a recording and transcript of a conversation between a native Japanese speaker and three Chinese intermediate learners of Japanese in which the native speaker discusses the difficulties she encountered studying in China.

Analysis showed that because of the learners' lack of understanding of Japanese, they found it difficult to understand and fully participate in the lengthy narrative; they interrupted the narrative by switching to similar topics in the middle of the Orientation and the Result or Resolution of the narrative. However, the native speaker accepted the interruptions and segmented her own narrative accordingly. Additionally, while segmenting the narrative, she also performed adjustments, such as managing the development of the topic as a narrator, giving the learners time to understand, and letting the learners talk about themselves.

We thus argue that adjustment by the native-speaker narrator is important. We also note that when Japanese learners listen to narratives, it is important for them to understand the elements of the narrative and the narrator's story, encourage the development of the narrative by showing empathy and understanding, and express their impressions and opinions related to the narrative at the Coda of the narrative.

Keywords: contact situation, narrative, collaborative construction, native speakers, adjustment